

事例を読む

出会いを支える

篠原直子

バケツに入れ、Y太と一緒に持ってきた。このころから、S夫の虫探しが始まったのだ。

『虫を探している時間』を読んだ時、私はまず一番に、このS夫の姿が心に浮かんだ。

夏ミカンの木の茂みをのぞき「ここはジャノメチョウはいるけど……」と話し、落ちていたセミの羽を手にとって「アブラゼミだな」とつぶやく小さな虫博士の〈R夫〉とは似ても似つかない、虫探し初心者のS夫である。何が共通項としてあったのだろうか。

● S夫の虫探し

「汚れることが嫌」「虫は苦手」というS夫が、虫とかわかるようになったのは、年長の夏が終わるころだった。仲良しのY太が、年長になって虫探しに夢中になったことが大きなきっかけだったと思われる。

とはいっても、虫嫌いが、そうすんなりと簡単に虫好きになったわけではない。最初は虫を探しているY太たちから離れ、一人でポツンとたたずむS夫の姿があった。やがて、アリの巣を見つけて大騒ぎのY太たちの背後から腕を後ろに組んで見るようになり、ある日、小さなゴミムシを「これは何？」と

あの秋の日のゴミムシをきっかけに、少しずつ虫に興味をもつようになった（というより、虫は怖くないとわかってきたかのように、恐る恐るかわるようになった）S夫は、その後、仲良しのY太と額を寄せ合せて、ダンゴムシを集め、アリの巣を探し出し、ゴミムシやバナナムシを宝の大発見のように喜ぶようになった。

そんなS夫の姿に、私も「よし！ それならば

……」と、図鑑や絵本を並べ、「何て名前の虫だろうね」と一緒にページをめくっては、『知的好奇心を育む援助』をしたつもりになっていた。

卒園後のある日、S夫の母が小さな包みを持って園を訪ねてきた。年少時はまったく虫に触れようとしなかったS夫が、年長の秋ごろからは、何度も繰り返し『昆虫のポケット図鑑』を借りてくるようになったという。卒園間際の最後の絵本貸出日にも、その本を選んできたので、そのことに心動かされた母が、入学記念に家庭でも同様のポケット図鑑を購入したこと。園の本がだいぶ傷んでいたので、S夫に買ったものと同じものを寄贈したいとのことだった。

母の言葉を聞いて私はハッとしました。私は、『図鑑』を提示することは、「名前を知る」「生息を調べる」ことだと考えていた。それを援助だと思っていた。

園で友達と一緒にめくった小さな図鑑を、S夫は

どんな思いで家に持ち帰っていたのだろう。ページをめくりながら、そこに何を見ていたのだろう。

それは、ツマグロヒョウモンのサナギを求め、深い緑の中を歩く〈R夫〉のまなざしと重なるものがあるように思えた。

『直接かかわらない時間の中で体験していることと、直接かかわる中で体験していることは、子どもの中で豊かに膨らみ、蓄えられているのではないか』という宮里先生の見取りは、S夫が週末ごとに絵本バッグに入れた小さな一冊にもいえるのではないか。その図鑑は『目の前にいる生き物についての知識を得るための手段』としてだけではなく、『これから出会うかもしれない未知の世界へのあこがれのまなざしや思いをのせた大切な道具』としてS夫のもとにあったのだろう。

●集める、手に入れる

さて、〈R夫〉と〈K夫〉がコオロギを捕まえる場面では、子どもたちの『集める』『手に入れる』とい

う行為について思いをめぐらせた。特に自然にかかわる場面においては、子どもたちが懸命に『集める』姿によく出会う。それは、小さな息吹を感じさせる虫や、あるいは自然の恵みである木の実や草花、落ち葉など、時には石ころなどにも及ぶ。子どもたちはなぜ集めるのだろうか。何を手に入れているのだろうか。

以前、三歳児と秋の遠足に出掛けた時のことである。ビニール袋いっぱいにドングリを集め、「さあ、そろそろ帰ろうか」と歩きだした時、一人の子どもが遊歩道に敷き詰められた砂利を拾い始めた。あれよあれよという間にほとんどの子どもたちが、しゃがみ込んで石を拾い始め、せっかく集めたドングリをザーツと袋から空け、せっせと石を入れ始めたではないか。若かりし日の私は、何を言っても聞いてくれない三歳児にオロオロしながら、投げ出されたドングリを自分のリュックサックに一生懸命拾い集めた。

三歳児らしいほほ笑ましいエピソードではあるが、右往左往したその時の気持ちは、今でもはつきりと覚えている。

そういえば、わが子も保育園のころ、石を集めるのが大好きで、大きささまざまな形の石を見つけてはポケットに入れて持ち帰っていた。時には先生に『とおきの魔法の石』をプレゼントしていたらしい。「日子ちゃんしてくれる石は、本当に魔法の力がありそうですよね」と笑って話してくれた保育者の言葉が今も忘れられない。

〈I夫〉が見つけたツマゲロヒヨウモンのサナギを「自分も欲しい」と思う〈R夫〉、「コオロギ、分けてあげようか？」と言われ、「自分で捕らえたい」と言う〈K夫〉の姿には、『自分が見つけて、自分で手にしたい』という思いの強さが感じられる。

子どもが「手に入れたい」「集めたい」と思う時、あるいは無意識に思わず手にしようとする時、その行為を突き動かしているものは何なのだろう。

自分の目で見つけ、自分の手で捕らえ、自分のものとして手に入れることは、やがて自分の手から離れるということをも含んだ上で、自分の存在をかたどる片鱗へんりんとして意味を成しているのではないか。だからこそ、子どもたちは集めるのではないだろうか。だとしたら、『自分で探し、手に入れる時間』とは、『自分自身を探し当て、作り上げていく時間』ともいえるのかもしれない。

● 出会いを支える存在

そのように考えていくと、〈R夫〉と共に歩んだ保育者の存在には、計り知れない大きな意味があると思えてくる。保育者は、〈R夫〉と共にツマグロヒヨウモンを探しつつ、〈R夫〉の『自分探し』に同行しているともいえるからだ。

以前、宮里先生が子どもたちとアケビコノハという不思議な形のチョウを探し求めた時の素敵な出会いの話を知ったことがある。

一枚の不思議な羽を手掛かりに、子どもたちと保育者、そして保護者をも巻き込んで、みんなが心躍らせ、思いを膨らませていった。そんなある日、保育者は思いもかけない場所でふと、アケビコノハの羽を見つける。まさに、「呼ばれた」としか言い表しようなないその状況を、『セレンディピティー（予想外の幸運な発見を偶然にする能力）』という言葉で、宮里先生は生き生きと語ってくださった。

保育者として子どもに何かを与えねばならぬということより、今この場所で共にいるということ、その時間の中に共に身を置き、何かはわからないけれど確かにそこにあるものを、共に味わおうとする姿勢こそが、子どもたちの豊かな出会いを支えていくのだろう。それは、自然界との出会いであり、自身との出会いでもある。私は、そんな保育者にあこがれ、自分もそうありたいと思う。

（練馬区立光が丘さくら幼稚園）